

最終報告書

指定 NPO 法人 地域環境ネットワーク
桑野 恭子

私は現在、10年前に自らも設立に関わった環境系 NPO 法人、行政が運営する中間支援機関、今年設立された公益財団法人の3つの組織の運営に関わっている。そこで私は、環境先進国と呼ばれるドイツの環境団体の資金調達、人材育成、組織構築について学び、団体の今後の運営に活かしたいと思いこの研修に参加した。以下に、この研修で学んだことや感想について述べたい。

① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

■ 資金調達

【広報活動の徹底】

日本においても NPO の情報開示の重要性が語られることが多いが、今回訪問したドイツの代表的な環境団体 NABU、BUND のいずれにおいても「広報活動」を重要視し、多くの時間と費用を費やしていることが印象的であった。パンフやポスター、グッズといった広報物の質の高さや戦略的な活用、こまめなプレスリリースを心掛けている点など、当団体でも参考にすべき点が数多くあった。

【共感を得ること】

今回の研修で度々でてきた言葉「共感を得ることの大切さ」。頭ではわかっているが、なかなか理解することができずにいたが、ラインヘッセン支部を訪れた時、理事や会員のみなさんのおもてなしを受け、ようやくそれをイメージすることができた。自分たちが住まう町の自然を守りたい思い×繰返しの中で得とくされたスムーズで印象的な視察対応×彼らの笑顔。これじゃあ、共感せざるを得ない。まずは、彼らを真似ることから始めてみよう。まずは、笑顔。今まで、寄附を得るために眉間にシワを寄せてきた。これではダメ。寄附のその先にある、みんなの笑顔を思うことができれば、きっと自分も笑顔になれるはず。

【×も大切な情報。しつこさ】

今まで、「寄附をしてくださった方」の名簿は作ってきたが、「寄附を断られた人」の名簿は作っていなかった。一度断られた人は、追いかけていない。理由は、遠慮と恥じらい。しかし、講師の言葉を信じるなら、ドイツ人も似たような気質のようだが、ドイツは EU の中でも経済が安定しているため寄附依頼の競争が激しくなっており、戦略的な展開が必要とされているらしい。なるほど。恥じている場合ではない。寄附を断られた人も、可能性はまだゼロではない。「とはいえ、いささか3回断られたらダメかも」とのことなので、3回は粘ってみよう！そのために、今まで単純に一覧にしてまとめていた寄附者名簿も、その方のフェイスが把握できる名簿に整理しなおしてみようと思っている。

■人材育成

【何度も話し合いの時間をもつこと】

F0J について話をお聞きした際、参加する若者を支援する仕組みや寄り添い方についてお話をうかがったが、これについては日本もドイツも同じだな、と思った。とにかく、良いタイミングと場所を選んで話し合うこと。これ以外の方法はない、と再認識できただけでも安心した。

■組織構築、ネットワーク化

【数の獲得を意識した行動】

NABU も BUND も、「数」が政策提言に最大の力を持つことを認識し、会員獲得には専門の業者を活用するなど、数の獲得を徹底している。今まで私は、「数」よりも「団体の専門性の高さ、質の高さ」に注力し、それが団体の存在意義、発言力を高める唯一の方法だと思っていたが、それだけでは不十分なことに気付いた。今後は、数と質、のバランスを考えながら展開を図りたいと思う。

【自己のマネジメント】

NABU も BUND も、組織構成が明確に分類され、自分の役割に専念できる環境づくりがなされている。訪問中、「これは、大きな組織だからできるんだ」と思っていたが、研修も終盤となって「いや、これは組織の大きさの問題ではなく、たとえ小さな組織であっても全く不可能なことではない」と思うようになった。つまり、まずは自分の団体の組織力をしっかり把握し、それに見合った活動をする。会社であればあたりまえのことだが、NPO の場合は思いが先にたって、自分の力以上のことをしようとしてしまう。しっかり自分をマネジメントすること。その基本を再認識することができた。また同時に、中間支援組織は NPO 団体が不足している部分を「補う」支援に注力しがちであるが、中間支援とは本来そういうものではないはずだ。その団体が持つ力と可能性を見極め、自己マネジメントできる力を養うサポートをすることが、本来の中間支援ではないかと思うようになった。

② 研修を通して、日本の環境ボランティアを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

■コーディネーターのチーム編成

今回の研修生のみなさんは、驚くほど広いネットワークを持ち、それを実践に活かしていた。昨今では、SNS などを活用することで「横のつながり」はある程度達成できているように思う。しかし、課題となるのは、行政や企業とのつながり。これらの特性を積極的に活かしながらもっている例は、先の横のつながりに比べて、薄いように感じている。大都市圏の場合は、この点はあまり気にしなくても、ある程度「個」として成り立つかもしれない。また、敢えて行政や企業との関わりを避けている団体もある。しかし、少なくとも私が住む地方都市・大分において、それは得策ではない。NABU の広報を担当するミシャルスキーさんとお会いして改めて感じたのは、コーディネーターの必要性だ。協働や連携。言葉では簡単だが、これは経験と大変な労力を要する作業だ。これを一団体としてこなせる NPO は、多くはないはずだ。そこで、これらをつなぐコーディネーターを介することで、広くその地域や他分野をも見渡した効率的な協働を図ることができるのではないだろうか。本来、この役目は行政が担ってきたところであるが、今や地域課題も多様化し、それに取組む NPO も様々で、一機関だけで対応で

きるものではなくてきている。また、一人のコーディネーターだけでは、サポートが一側面になりがちであり、スピード感をもつことができない。コーディネート力に優れて知識や経験を持つ者がチームを組み、支援することできる体制をつくることができれば理想だと思う。

■NPO、行政、企業それぞれの認識向上を図るための教育

リーダーは、常に「協働」を意識することが求められているわけだが、残念ながら協働を成す為の知識と意識を持たない NPO が多い現実がある。また、同じく協働を重視せねばならない行政、企業も、NPO の現状と大差がない。まずは、協働の必要性を認識し、そのために各々の立場が求められ得ることを知り、実行せねばならない。当方では、昨年から今年にかけて協働をテーマに NPO、行政、企業に対する意識調査を行っており、現在分析中だ。それをベースに戦略をたて、まずはそれぞれに対して基本的な意識付けを行うセミナーやマニュアルの作成を検討、実施したいと考えている。

③ 全体を通しての感想

■地道な取組みの積み重ね、繰り返す

実際にドイツに行ってみて思うのは、「活動の展開に王道は、ない」ということ。少なくとも、今回訪問した先の方々は、私と似たようなことに悩みを持ち、似たようなアプローチを試みていた。そして彼らは、小さく地道な作業を日々積み重ね、結果が思わしくなくても諦めず、繰り返しチャレンジしていた。「積み重ねること、繰り返すこと」。環境先進国とよばれるドイツで、実際にそれを支えている人たちの姿は、日本と同じだった。今、私が進んでいる道に、方向に、大きな間違いはないようだ。安心した。あとは、諦めないこと。

■広報活動の重要性

もちろん広報活動の重要性は認識しているつもりだったが、認識が甘かった。もっと、もっと、時間とお金を費やさねばならぬ。「共感してもらうこと」がすべての始まり、ということを経験で何十回も聞かされた。了解。それは、ラインヘッセン支部で、十分体感した。次は、実践。見よう見まねでやってみよう。積み重ねと、繰り返しの精神で。

■個をみがくこと

今回の訪問先はいずれも、組織もプログラムも成熟していた。それを達成するために必要なものは何か？ それは、何とんでも「みがかれた個」。NPO 活動を始めて約 10 年。歳も 45 才。嫌でも、気付かぬ硬い垢が身を覆っている。しかし、今回研修に参加した仲間、通訳の小島さん、添乗員の若井さん、いずれも素晴らしく「磨かれた個」だった。彼らに出会えたことで、私自身もすこ〜し磨かれたような気がする。せっかく頂いたこのご縁を、大分県に引っ張り込みたい。彼らに、大分の「磨かれた個」の拡大に力を借りたいと思っている。

みなさん、これからも引き続きどうぞヨロシクお願いします！！